

磯田長秋

— 船橋で時を描いた日本画家 —



令和4年度船橋市所蔵作品展
「磯田長秋—船橋で時を描いた日本画家—」
2022(令和4)年12月7日(水)～18日(日)
船橋市民ギャラリー

主催
船橋市教育委員会
公益財団法人船橋市文化・スポーツ公社

ごあいさつ

令和4年度船橋市所蔵作品展では、明治末から昭和初期にかけて活躍した船橋ゆかりの日本画家・磯田長秋(1880-1947)の画業を紹介します。

磯田長秋は歴史的な出来事、人物を主題として扱う「歴史画」を得意としました。精緻な筆致で描かれた作品からは、戦いに挑む武将の張り詰めた空気や古典世界に広がる雅な雰囲気を感じることができます。

若き日に安田鞞彦(1884-1978)らと活動を共にしながら研鑽を積み、文展や帝展といった官展に出品するなど、活躍の場を広げました。1928(昭和3)年には、明治天皇・昭憲皇太后の一代記を表した明治神宮外苑聖徳記念絵画館壁画の制作事業に参加し、《地方官会議臨御》(1928年)を描き、その後、明治神宮に鎮座20年を期して企画された《明治神宮鎮座絵巻》(1936年)を奉納しました。

1922(大正11)年、長秋は船橋町九日市(現・船橋市本町)に移り住み、割烹旅館「玉川」や意富比神社(船橋大神宮)に作品を納めるなど、地域に足跡を残しています。描かれた作品は、船橋の人々の手に受け継がれ、節句やお祝い事の折に飾られ、生活の中に溶け込んでいました。また、2020(令和2)年、船橋市がご遺族から寄贈を受けた24冊の日記には、長秋が亡くなる1947(昭和22)年までの日々の暮らしの様子が、事細かに綴られています。このように、長秋の作品・資料を見ていくことは、一人の画家についてだけでなく、大正・昭和期の船橋における文化コミュニティの姿を想像し、形作ることに繋がります。

このたびの展覧会は、現存する作品・資料を手がかりに、歴史に埋もれていた長秋の画業を再発見・再評価し、彼が生きた時代を見つめ直す試みです。

なお、最後になりますが、本展覧会の開催と図録制作にご理解をいただき、ご指導とご協力を賜りましたご遺族の皆様、貴重な作品をご出品いただきました意富比神社(船橋大神宮)および所蔵者の皆様、ご協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

令和4年12月

船橋市教育委員会

目次

| | |
|--------------------------|----|
| 磯田長秋－船橋で時を描いた日本画家－ 益子実華 | 4 |
| 図版 | |
| 第1章 若き日の磯田長秋 | 6 |
| 第2章 紅児会の仲間たち | 9 |
| 第3章 明治神宮外苑 聖徳記念絵画館 | 12 |
| 第4章 History painting 歴史画 | 15 |
| 第5章 船橋での磯田長秋 | 18 |
| 忘恩の徒 磯田長秋 | 26 |
| 磯田長秋 略年譜 | 27 |
| 磯田長秋 印譜 | 28 |
| 主要参考文献 | 28 |
| 作品・資料目録 | 29 |

謝辞

本展覧会と図録制作にあたり、ご遺族の皆様をはじめ、下記の関係各機関ならびに関係者の皆様方に多大なご協力を賜りました。ここにお名前を記すことのできなかった皆様を含め、心より感謝申し上げます。

| | | |
|-------|-------|----------------|
| 磯田聰子 | 立野晃 | 意富比神社(船橋大神宮) |
| 磯田和宣 | 田中潤 | 鎌ヶ谷市郷土資料館 |
| 磯田千鶴子 | 千葉敏 | 明治神宮 |
| 木村昌弘 | 藤井正弘 | 明治神宮外苑 聖徳記念絵画館 |
| 内田努 | 三石宏 | 佐野市立吉澤記念美術館 |
| 清川明子 | 安田由紀夫 | 株式会社玉川 |
| 進藤玲奈 | 矢野光正 | |
| 末武さとみ | 山本芳嗣 | (敬称略) |
| | 湯川昌彦 | |

凡例

- 本図録は令和4年度船橋市所蔵作品展「磯田長秋－船橋で時を描いた日本画家－」の出品作品を基に編集した。
- 各作品・資料のデータは次の順で記した。
作品・資料目録番号
作者名
作品・資料名
制作年月日等
素材・技法、種別等
寸法 [縦×横(×奥行)cm]
所蔵先
- 章解説及び作品・資料解説の執筆は益子実華(船橋市教育委員会 文化課)が担当した。但し、P10 安田鞞彦書簡の翻刻、及びP19～21 磯田長秋日記に関する解説、P21「昭和八年七月磯田長秋画伯作品頒布会」の資料解説は小田真裕(船橋市教育委員会 郷土資料館)、P17 コラム「牧童図」は出口真結(船橋市教育委員会 文化課)が担当した。

磯田長秋 — 船橋で時を描いた日本画家 —

益子 実華

はじめに

2020(令和2)年、日本画家・磯田長秋(1880-1947)の資料が遺族から船橋市に寄贈された。市では既に長秋の作品を3点所蔵していたが、この寄贈を機に、磯田長秋の本格的な調査を開始した。寄贈資料の内容は、長秋が使用していた書物や明治神宮外苑聖徳記念絵画館壁画の下図(cat.no.19)、その作品完成の際の記念品(cat.no.22, 23)、そして長秋が1915(大正4)年から1947(昭和22)年の間に記した24冊の日記(cat.no.34)などであった。

長秋について調べ始めると、芋づる式に様々な事がわかってきた。資料、作品、遺族や関係者の話が、点と点が線となるように繋がり、「磯田長秋」という人物像、画業が浮かび上がってくる。今回の展覧会は、現時点までの調査報告であり、長秋の画業も一部の紹介に限られるが、この調査における「発見」のおもしろさを、多くの人と共有できることを願っている。そして、本展のタイトルには「船橋で時を描いた日本画家」という副題を付けた。本稿では、長秋の画業を見ていきながら、彼がどんな「時」を描いたのかを考えたい。

時の流れを描く

長秋は1897(明治30)年、17歳のときに、小堀鞆音(1864-1931)のもとに入門した。小堀鞆音は近代の「歴史画」を確立した人物である。「歴史画」とは、歴史上の人物や物語を主題とした絵画のジャンルで、小堀鞆音は歴史考証に基づき、忠実に歴史を再現することを試みていた。

長秋が入門した翌年には、同世代の門下生が集まり、研究会「紫紅会」(後の「紅児会」)を発足させた。発足メンバーには長秋の他に、安田鞆彦(1884-1978)、山川永雅(1878-1947)などがある。後には今村紫紅(1880-1916)らも加わった。活動していた15年の間に紅児会は規模を拡大し、メンバーたちは日本画壇を牽引、各々が歴史画家としての道を切り開いていった。長秋が50歳の時、「こんなふうに懐古しますと私が可細くも今日あるは、友人安田鞆彦さんのたまものであり、紅児会の今村紫紅さんその他の諸氏の激励の所以と思ひます。」「*1」と自ら述べているように、長秋の「歴史画」は、師から学び、仲間と切磋琢磨することで形作られていったと言えるだろう。このように、長秋は歴史画家としての道を歩んでいくが、当時の「歴史画」とは、どんなものだったのだろうか。

日本では明治時代になり、欧米の価値観が流入してきた。「美術」という概念も明治以降に生まれたものである。それまで、一般の人々にとっての視覚文化は浮世絵が中心であり、そこには、美的なものを鑑賞する目的だけでなく、「報道」や「娯楽」といった要素が含まれていた。その後、次第に、絵画において、国の目指す指針を表すような政治的な動きが出てくる。歴史教育の一環としての「歴史画」が生まれ、「忠孝」といった教訓を伝える、国の歴史イメージづくりが行われた。また、明治30年代になると、「芸術」としての価値が高められた「歴史画」が現れる。ちょうど小堀鞆音が画壇で活躍し、紅児会が活動を始めた頃であり、彼らが目指した「歴史画」こそ、この時期に「芸術」となった「歴史画」と言えるだろう。ここで、それまでの「歴史画」との違いを、長秋の言葉や作品から考えてみたい。

1918(大正7)年、美術雑誌に掲載した文章の中で、長秋は「歴史画にしても何等の情緒をも伴わないものはたとへ故実に正確

であり、描写に忠実であっても何等の感興も湧くものでない。」「*2と、小堀鞆音の作品を例に出し、歴史画における「情緒」の重要性を語っている。それまでの教訓を伝えるような「歴史画」と、師から学び、自身が目指している「歴史画」の違いが、この「情緒」という心の動きや雰囲気といった抽象的なものを表現しているか否かという点にあるのではないだろうか。

長秋が描いた《醍醐乃花見》(cat.no.28)を見てみると、晩年の秀吉の心穏やかな様子が表され、春の暖かい風までも感じられる。その空気感こそ「情緒」であろう。さらに、長秋は「時の流れ」という抽象的なものを「歴史画」で表そうとしたように思われる。「歴史画」を描く上では、継続する物語の中の一場面を切り取らなくてはならず、どこの場面を切り取るかが、歴史画家にとっての腕の見せどころである。絵画は、文学のように歴史的事象についてその展開の過程を説明することは難しい。それにもかかわらず、「時の流れ」を描くとはどんなことなのだろうか。当時の美術評論家・大口理夫(1909-1948)は、歴史画について、以下のように述べている。

(前略)豊富な想像力は歴史画家にとって実に有力な武器であらう。更に歴史画は、これに時間の流れとも云ふべきものの表出を期待出来る一つであるが、画家の宇宙に対する芸術的な直感と妙筆によつて若しこれが微妙に表現されることがあれば、これは望外の獲物である。*3

晩年、長秋は《夜襲》(fig.no.1)という「元寇」の場面を描いた作品を、文展に出品した。現在、作品の行方は明らかではないが、その絵葉書を見てみると、兵士たちが小船に乗り込み、岸から離れる様子が描かれていることがわかる。兵士の視線の先にある敵船に向かう、張り詰めた空気の中で、小船を押す人物たちによって、その船が少しずつ進んでいるかのように見えてくる。長秋は元寇を題材とした作品を多く描いており、《(元寇)下図》(cat.no.8)では、遠くに見える敵船を臨む騎馬兵の姿を、まさに、劇的な一瞬を切取ったように印象的に表現している。しかし、同じ長秋の作品でありながら、《夜襲》においては、異なる表現をしている。次から次に打ち寄せる波、少しずつ動いていく船、ここに「時の流れ」を感じ取ることはできないだろうか。

時代を描く

前述の《夜襲》などで扱われている「元寇」という題材は、近代という時代を反映したものである。「歴史画」では愛国思想を高揚するような題材がしばしば取り扱われ、歴史教育、美術教育は国のイメージづくりに大きな影響力をもっていた。中でも、「元寇」という題材は、太平洋戦争時になると、元軍がアメリカ軍に置き換えられ、国民の戦意向上を促すものとなる。戦時下に、戦争を概念的に表現した「歴史画」は、同時代の戦闘場面や兵士の姿を描いたものと同様「戦争画」に含まれる。長秋に限らず、多くの画家達が戦時下において、その時代を反映するような作品を描いている。

明治初めまで、同時代の出来事を表す役割は「浮世絵」が担っていた。しかし、前述したように、絵画の芸術的価値が独立し、「娯楽」や「報道」といった浮世絵が持っていた性格が切り離されていった。明治末から大正時代には、絵画の芸術的価値が明白なものとなり、「個性」を表現することに重きが置かれるようになる。そのような中、主題のもつ制約が多い「歴史画」のあり方を、歴史画家

達は考えるようになった。1918(大正7)年、長秋は「土佐絵の将来」という文章を書いている。古くから続く日本独自のやまと絵の伝統を受け継いだ画派に、土佐派があり、小堀鞆音もその流れにあることから、長秋は自分たちが描く「歴史画」を「土佐絵」と呼んでいる。

言ふまでもなく、如何なる芸術も、それが存在の理由として必ず時代の生活に共鳴を有つことを一の条件とするものである。故に何等も時代的理解なく徒に古人の模倣踏襲を試み、而して単純なる歴史的権威を以て民衆に臨むは、一切の権威を嫌悪し、因襲の解放を主潮とする現代の民主的傾向とは所詮相容れないこととなる。^{*4}

ここで長秋は、自分たちの時代に共鳴した「歴史画」を描くことの重要性を説き、さらに、以下のような見解を示している。

今日の土佐絵は漸く陳套の類型を脱し主として情緒を表現しようとするところに浮世絵に接近する傾向があり、一方浮世絵は動もすれば卑俗に流れやすい傾向あるを免れて一段の品位を現はさうとする所に土佐絵と接近する趣がある。故に若し両派の此の新傾向が円満に無礙に発展しつゝ、行ったならば或いは土佐絵と浮世絵とが契合する時代が来やしないかと思はれぬでもない。^{*5}

長秋が上記の文章を載せた5年後に、関東大震災が起こる。長秋はその時の様子を描き、西澤笛畝(1889-1965)らと共に『大正震災火災木版画集』として出版している。本作品は、その画集の巻頭で述べられているように、「民衆的娯楽」の木版画でこの大厄災を芸術化する目的で刊行された。まさに、震災が起きた時の状況、「その時」を木版画という、多くの人が浮世絵を連想する技法で伝えようとした。日清戦争以降の印刷技術の向上などにより、浮世絵の「報道」や「娯楽」としての役割は写真や絵はがき、新聞・雑誌の挿絵に移行していたが、ここでは、木版画が選ばれている。

長秋の作品には、彼が生きた時代が表されている。それは、当時の様子が描かれた作品だけでなく、歴史物語の場面が描かれている作品にも言える。歴史物語を題材として、同時代のことを伝える風刺的な手法は、浮世絵がとっていたものである。震災や戦争が背景にあるとしても、長秋が述べた「土佐絵と浮世絵の契合」が「時代を描く」という点において、後の彼の作品で行われていると言えるだろう。

船橋で描く

さて、浮世絵は「大衆」に親しまれたものであるが、長秋の作品も同様に、人々の生活の中に入っていた。そのことは、彼が暮らした船橋に残された作品、資料から見てとれる。長秋は1922(大正11)年に居を構え、一時東京に移り住んだが、再び船橋に戻り、亡くなるまでこの地で生活した。市所蔵作品や、割烹旅館「玉川」の作品、意富比神社(船橋大神宮)に納めた作品とそれに伴う資料の情報をつなぎ合わせることで、作品のまわりに広がる世界が見えてくる。

船橋市湊町で100年続いた割烹旅館「玉川」の玄関には長秋の《富士図》(cat.no.37)が飾られていた。遺族のもとに残されていた「昭和八年七月 磯田長秋画伯作品頒布会」資料(cat.no.38)からは、頒布会が玉川で開催されたこと、参加者には医師、商家、議員など、船橋町の名士たちの名前が連なっていることがわかる。そこには清川弘道(1882-1961)の名前もある。市の所蔵作品は1999(平成11)年、2000(平成12)年に船橋で医業を営んでいた清川家から寄

贈を受けた清川コレクションが核となっている。清川コレクションには日本画も多く含まれているが、調査を進めていくと、それらの作品は長秋と近い画家達によるものであることがわかり、船橋での日本画家のコミュニティの存在が浮かび上がってきた。

さらに、長秋の日記から得られる情報量は計り知れない。起床時間から作品制作、日々の暮らしについて詳細に記され、そこには画家の名前や、前述した清川弘道の名前も現れる。日記からは長秋という画家個人についてだけでなく、当時の船橋の様子まで見えてくる。日記の解読は、大正から昭和初期にかけての「船橋」を理解することにつながるだろう。

1949(昭和24)年、長秋の没後三周年に、意富比神社(船橋大神宮)で開催された遺作展の目録(cat.no.40)を見てみると、作品の出品者は、長秋の遺族や画家仲間、そして前述した、玉川での作品頒布会に参加していた船橋の人々ということがわかる。

今回の調査の中で、清川コレクションの長秋作品《高砂》(cat.no.35)は、毎年、正月に床の間に飾られていたという話を清川家の遺族から聞いた。今後、船橋で調査を進めていく中で、長秋の作品を持っているという話が、市民から出てくるのではないだろうか。その作品には、清川家の《高砂》のように、家族との物語があるだろう。長秋の作品と船橋の人々との様々な物語が開けることを楽しみにしている。

まとめ

1880(明治13)年に生まれ、1947(昭和22)年に亡くなった長秋は、日清、日露、日中、太平洋戦争という、大きな4つの戦争を体験した。そんな時代に彼が描いた「歴史画」は、戦後、表に出ることがなくなった。戦争の「時」を映し出した長秋の作品は、戦後の「時」においては、「見てはいけぬもの」「見たくないもの」であったのかもしれない。しかし、現在、この「時」に、私たちの眼で、長秋の作品を再び見ていくことができたと思う。そこには、今を生きる自分たち自身を見つめ直すことにも繋がるような、新しい発見があるのではないだろうか。「時」は流れていくものである。作品、資料、そこから発見したことを、次の「時」、未来に語り継ぎ、残していかなければいけない。この取り組みを、長秋が暮らした「船橋」という地で、始めたいと思う。

(船橋市教育委員会学芸員)

- *1 磯田長秋「忘恩の徒」『巽』(二月 長秋号 笛畝号)第3巻第2号、1930年2月
- *2 磯田長秋「土佐絵の将来」『絵画清談』第6巻2月号、1918年2月
- *3 大口理夫「歴史画に就いて」『現代美術』第2巻第1号、1935年4月
- *4 磯田長秋「土佐絵の将来」『絵画清談』第6巻2月号、1918年2月
- *5 同上



fig.1 「第五回文部省美術展覧会出品 夜襲 磯田長秋氏筆」 絵葉書

第1章 若き日の磯田長秋

1880(明治13)年5月5日、磯田長秋(本名・内田孫三郎)は、内田彦衛門の長男として東京市日本橋区信和泉町3番地に生まれ、1889(明治22)年、数え10歳の時に磯田家の養子に入った。10代の頃から画家を志し、はじめ狩野派の芝永章に弟子入りするも、永章の病のため、学ぶことができなくなった。そこで、紹介されたのが小堀鞆音(1864-1931)である。小堀鞆音との出会いが、その後の長秋の「歴史画家」としての人生を決定づけた。

小堀鞆音は、明治時代において日本画が形成される中で、歴史上の人物や物語を主題とした「歴史画」を確立した人物である。平安時代から伝わる公家や武家の儀式や慣習、それを研究する学問である「有職故実」を学び、歴史考証に基づきながら武具や装束などの描写を作品に落とし込み、「歴史」を忠実に再現しようと試みた。特に武具へのこだわりが強く、甲冑自体の研究にも熱心に取り組んだ。甲冑を収集し、自ら修理を行い、装着する。昔の衣装に身を包んだ人を写生する。そんな師の作画方法を長秋は引き継ぎ、「歴史画」を描く心構えを身に付けていった。本章では、長秋の画集の出発点と「歴史画家」として歩んでいくきっかけとなった「武者絵」を彼がいかに表現したのか、その一部を紹介する。

鞆音のもとに弟子入りして間もない頃、長秋が武者絵を描くと「そんな出駄羅目な武具を描いて、それで将来を歴史画に託すつもりなのか」「歴史画をやってみるつもりか、そんならばもつと真剣になつて勉強しなければいけない」と叱られたことを、後に振り返っている*1。その後の長秋の努力は、彼の作品と遺族のもとに残された多数の歴史書から伝わってくる。

画家として成長した長秋の主な活動の場は、政府が主催する美術の公募展覧会「官展」であった。1907(明治40)年第一回文展から入選し、1915(大正4)年には《住の江》で三等賞を受賞。その後も入選を重ね、1925(大正14)年には帝展委員となった。

*1 磯田長秋「忘恩の徒」「巽」(二月 長秋号 笛吹号)第3巻第2号、1930年1月



磯田長秋
個人蔵



1
磯田長秋
八幡太郎義家
制作年不詳
絹本着色
114.0 × 42.0
個人蔵



画業を志した磯田孫三郎(長秋)は、はじめ狩野派の芝永章のもとに学ぶも、1897(明治30)年から小堀鞆音(1864-1931)に師事することになった。

長秋の遺族のもとには、小堀鞆音に弟子入りする前、鳳章と名乗っていたころの模写や作品が残されている。拙さはあるものの、丁寧な筆致で描かれた作品には、晩年まで続く長秋の画風の特徴を見ることができる。

2(左)
磯田鳳章(長秋)
静御前
制作年不詳
絹本着色
120.0 × 42.0
個人蔵

3(右)
磯田鳳章(長秋)
写画(雪舟之図)
1896(明治29)年
11月下旬
紙本墨画淡彩
110.0 × 54.7
個人蔵

こほりともと 小堀鞆音(1864-1931)

日本画家。下野国(栃木県)に生まれる。1884(明治17)年上京後、有職故実を学び、歴史画に研鑽を積む。1896(明治29)年、岡倉天心の抜擢で東京美術学校(現在の東京藝術大学)の助教授となる(美術学校騒動で辞職)。1902(明治35)年に歴史風俗画会を結成。官展で活躍し、1907(明治40)年第一回文展からは審査員を務める。長秋をはじめ、安田靉彦や山川永雅など、多くの後進を育てた。



小堀鞆音
個人蔵



4(左)
小堀鞆音
獅子図
制作年不詳
紙本墨画
123.6 × 30.3
個人蔵

5(右)
小堀鞆音
端午太刀
制作年不詳
紙本着色
123.8 × 29.3
個人蔵



1929(昭和4)年、小堀鞆音門下の画家4名は、揃って50歳になることを記念し過去の甲冑の名作を複製することとした。小堀鞆音が図面を手掛け、年末に完成。くじ引きにより、長秋の元には、菅田天神社の小桜韋威鎧(1952年国宝指定)の複製が渡った。写真は翌年に行われた鎧着初式で撮影されたものである。

左から羽石光志、小山栄達、丹波緑川、伊東紅雲、磯田長秋、棚田暁山
1930(昭和5)年 個人蔵



6
磯田長秋
兜

制作年不詳
紙本着色
124.5 × 30.5
個人蔵

7
磯田長秋
凱旋

制作年不詳
紙本着色
38.4 × 50.6
船橋市西図書館



近代日本における「歴史画」では、愛国思想を高揚するような画題がしばしば扱われた。鎌倉時代の蒙古襲来での武士達の勇敢な戦闘場面を描く「元寇」もその一つである。明治時代から多くの画家によって作品が制作されているが、太平洋戦争時になると、元寇における元軍がアメリカ軍に置き換えられ、国民の戦意向上を促すものとなった。長秋もその時代の空気の中で、作品を制作した。夜間奇襲をする兵士たちを描いた《夜襲》(1942年)を第5回新文展に出品。また、元の軍船に乗り移って戦う場面を《襲寇敵船》(1942年、東京国立近代美術館蔵)で表している。現在、《(元寇)》の所在は明らかではないが、下図からも、画面左上に見える船に向かう兵士たちの姿を印象的に表現していることがわかる。

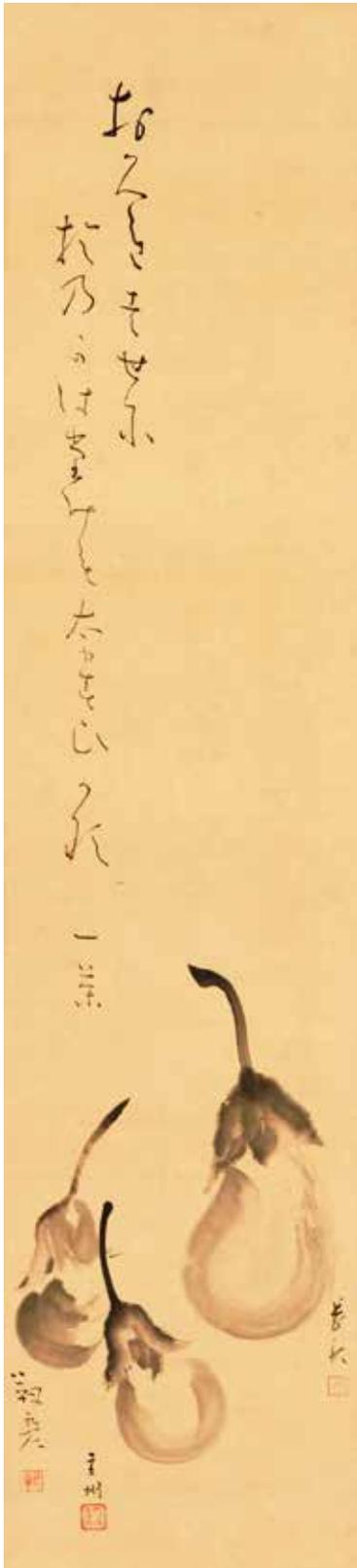


《(元寇)》作品写真
個人蔵

8
磯田長秋
《(元寇)》下図

制作年不詳
墨・鉛筆・朱／紙
169.0 × 168.0
個人蔵

第2章 紅兎会の仲間たち



長秋が小堀鞆音の門を叩いた翌年の1898(明治31)年、門下の8名の青年が「紫紅会」という研究会を立ち上げた。同会のメンバーは長秋の他に安田鞆彦(1884-1978)、山川永雅(1878-1947)、小山栄達(1880-1945)などが名を連ねた。最初は内輪で絵を持ち寄って批評し合う小さな研究会であった。今村紫紅(1880-1916)が加入し、同名では紛らわしいということで、研究会の名を「紅兎会」と改める。

会員が増え、研究会の規模は拡大し、意見交換をするだけでなく、展覧会で作品を公開することを始めた。1902(明治35)年7月に第一回展覧会を日本橋の常盤木倶楽部で開催してから、紅兎会が解散する1913(大正2)年8月までの15年間に19回に亘って続けられた。長秋は、紅兎会での活動のことを次のように振り返っている。

(前略)研究会も実に盛んで皆熱心なものでした。新聞ザラなんかに立派な製作をしてくるといつた有様でした。元気もありました。今の東京市役所の明地へ行つてよく角力を取つたものです。遠足をしたり、小旅行を心みたり、専ら安田さんが先導になつてやられました。(後略)*¹

活動していた15年間に、展覧会評が一般紙に掲載されるなど、紅兎会は世間的な地位を確立していった。そして、一人一人の活躍も目覚ましく、多くの会員が官展で受賞、大正以降の日本画壇をリードするような存在となった。紅兎会解散後は、各々の画家が歴史画家としての道を切り開き、異なる場で活躍していった。しかし、若かりし日に共に過ごし、切磋琢磨した仲間たちとの親交は、生涯を通じてのものだった。

長秋の遺族のもとには、仲間たちが描いた作品や安田鞆彦から長秋宛の書簡が残されている。書簡のやり取りは長秋が亡くなる頃まで続き、作品の批評や、長秋を労わるような言葉が綴られている。

船橋市は紅兎会の仲間たちの作品を所蔵している。共に研究会を発足させた山川永雅は、船橋に住む長秋のもとを頻繁に訪れ、割烹旅館「玉川」に作品を残した。千葉出身の石井林響(1884-1930)と長秋は公私ともに親しくしており、後に長秋は「自分が船橋町を選び東京から移住したときなどは非常に嬉んでくれました」*²と、林響のことを話している。また、川船水棹(1887-1981)は、長秋の紹介で小堀鞆音のもとに入門。長秋について語った文「沈黙・温情」には、長秋への尊敬や親しみが込められている*³。

* 1 磯田長秋「忘恩の徒」『巽』(二月 長秋号 笛畝号)第3巻第2号、1930年1月

* 2 磯田長秋(無題)『土筆』第4巻9号、1930年9月

* 3 川船水棹「沈黙・温情」『巽』(二月 長秋号 笛畝号)第3巻第2号、1930年1月

9
磯田長秋・安田鞆彦・古賀玄洲
茄子合作

制作年不詳
紙本墨画
127.0 × 29.0
個人蔵

紅兎会
個人蔵



やすだ ゆきひこ

安田 鞞彦(1884-1978)

日本画家。1884(明治17)年、東京に生まれる。1898(明治31)年小堀鞞音に師事し、同年、長秋らと紫紅会(のちの紅児会)を結成、研究活動や作品発表の中心人物となる。翌年に東京美術学校に入学するも、半年で退学。

1907(明治40)年の第一回文展で三等賞を受賞、その後、新古典主義と評された画風を確立していく。

1944(昭和19)年から1951(昭和26)年まで東京美術学校教授を務め、1948(昭和23)年には文化勲章を受章した。

10(左)
安田鞞彦
鐘馗図

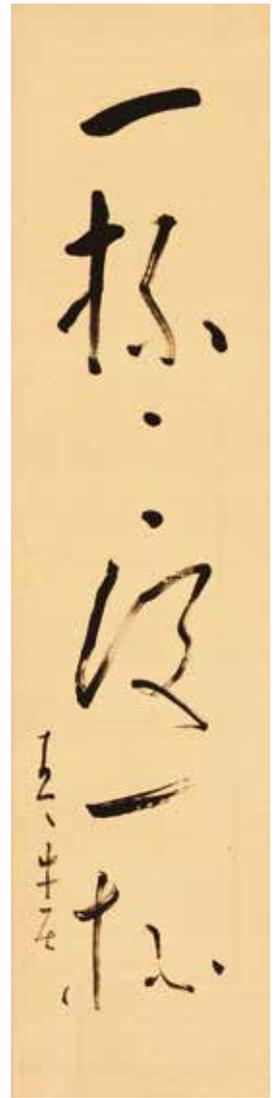
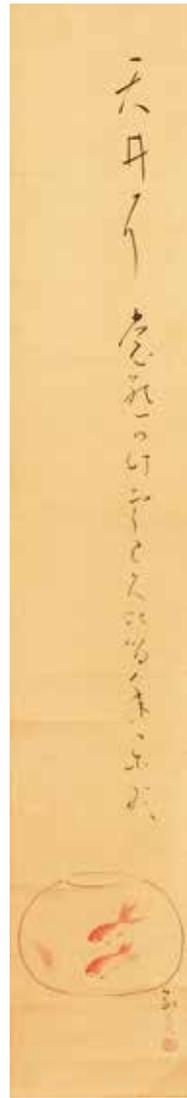
制作年不詳 紙本墨画
130.5 × 27.5 個人蔵

11(中)
安田鞞彦
金魚

制作年不詳 紙本着色
133.8 × 22.4 個人蔵

12(右)
安田鞞彦
一杯、復一杯

制作年不詳 墨／紙
129.5 × 30.3 個人蔵



13
磯田長秋宛て安田鞞彦書簡

1944(昭和19)年1月27日(消印)

便箋：墨／紙、25.3 × 17.7

封筒：墨／紙、21.2 × 8.2

《虎の図》絹本墨画、5.7 × 12.0
個人蔵

長秋にとって鞞彦は、画家仲間であり、親しい友人であるだけでなく、尊敬する相手であった。長秋が50歳を迎える1930(昭和5)年、自らを振り返った文章では、「私が可細くも今日あるは、友人安田鞞彦さんのたまものであり、紅児会時代の今村紫紅さんその他の諸氏の激励の所以と思ひます。故に安田さんが居なかつたらまるで私は形なしであつたゞろうと思つております。」*1と語っている。

二人の親交は、遺族の元に残された作品や書簡から見て取れる。鐘馗図(cat. no.10)は、長秋の三男・光海の誕生を祝し、鞞彦から贈られたものである。また、1944(昭和19)年1月の鞞彦からの書簡には虎の図が同封されていた。光海が入営したことを知り、無事を祈って描かれたものである。書簡には、兵役中の鞞彦の息子の話など、鞞彦や家族の近況と長秋の身体を労る言葉が綴られた後、以下の文が添えられている。

これは迷信なのですが 虎の画二枚入れました 一枚の馳せてゐる牡の方を光海さんへ御送り下さつて お守りの中へでもお入れ下され 他一枚の牝の方はお宅へお置き下さると 無事に御凱旋になるそうです 本当は寅年の人の描いたのがいゝのだそうで 小宅では鍋木清方さんから貰ひました ほんのつまらない事ですが 御笑納下さい 小妻が持参するつもりで居りましたが まだ風邪氣(ワカ)でゐますので お送りする次第です

光海は無事帰還し、現在、書簡と共に牝の虎の図が残されている。

*1 磯田長秋「忘恩の徒」『巽』(二月 長秋号 笛吹号)第3巻第2号、1930年1月



14(左)
石井林響
晩秋の図(焚火)
1918(大正7)～
1920(大正9)年頃
絹本着色
139.8 × 49.6
船橋市
(清川コレクション)



15(右)
石井林響
閑郷柳塘之図
1928(昭和3)年
紙本着色
154.0 × 34.6
船橋市
(清川コレクション)

いしい りんきょう
石井 林響(1884–1930)

日本画家。1884(明治17)年、千葉県に生まれる。初め天風と号す。1902(明治35)年下村観山の勧めで橋本雅邦に師事する。1907(明治40)年の第一回文展に入選。同年、岡倉天心を会長とする国画玉成会の創立に参加した。1910(明治43)年頃紅児会に入会、長秋らと活動を共にする。晩年は大網白里市に居を移し、画業に励んだ。1930(昭和5)年、『土筆』の林響追悼文にて、長秋は「自分に対しては打解けた態度で特に親切に製作上は元より家庭の事に至る迄能く注意してくれました。」「*1」と、二人の親交を語っている。

*1 磯田長秋「(無題)」『土筆』第4巻9号、1930年9月

やまかわ えいが
山川 永雅(1878–1947)

日本画家。1878(明治11)年、東京に生まれる。1897(明治30)年から小堀鞞音に師事し、長秋らと紫紅会を結成、活動を共にする。文展、帝展で受賞を重ねた後、帝展委員となった。船橋市では《義家》と割烹旅館「玉川」旧蔵《宇治川先陣》の2点を所蔵している。



16(右)
山川永雅
義家
制作年不詳
絹本着色
139.0 × 42.0
船橋市
(清川コレクション)

17(下)
山川永雅
宇治川先陣
制作年不詳
絹本着色
40.0 × 143.5
船橋市



18(左)
川船水棹
雀にざくろ
制作年不詳 紙本着色
130.2 × 33.0 船橋市

かわふね みさお
川船 水棹(1887–1981)

日本画家。1887(明治20)年、東京に生まれる。長秋とは画を志す前から交流があり、長秋の紹介で1904(明治37)年小堀鞞音の門下となる。1907(明治40)年から紅児会に参加した。1915(大正4)年第九回文展に初入選。1920(大正9)年第二回帝展以降入選を重ね、1929(昭和4)年第十回帝展で特選となった。川船水棹が長秋について語った「沈黙・温情」には、長秋を「先輩であり恩人」として慕い、長秋の人柄がわかるエピソードが多く含まれている*1。

*1 川船水棹「沈黙・温情」『巽』〈二月 長秋号 笛吹号〉第3巻第2号、1930年1月



第3章 明治神宮外苑 聖徳記念絵画館

長秋は1928(昭和3)年、明治神宮外苑 聖徳記念絵画館に縦3メートル・横2.7メートルほどの巨大な作品《地方官会議臨御》を奉納した。

1912(明治45)年7月30日、明治天皇が崩御された後、明治神宮(内苑)と神宮外苑の創建が発案された。外苑には、明治天皇とその皇后である昭憲皇太后の一代記を表した絵画を展示する施設として聖徳記念絵画館が建てられることになる。

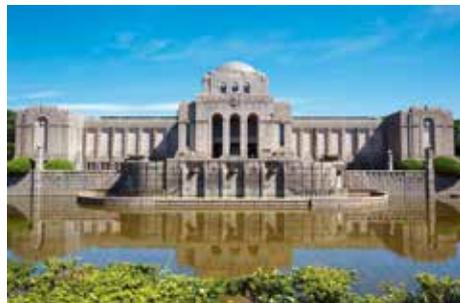
1915(大正4)年に発足した明治神宮奉賛会が中心となり、プロジェクトが進められ、1926(大正15)年10月、着工から7年の歳月を経て聖徳記念絵画館の建物が完成し、1936(昭和11)年には全80点が出揃った。

画題や作者等の選定は明治神宮奉賛会の絵画委員会が行った。80の画題を日本画40点、洋画40点に分け、原則一人の画家が一作品制作することとなり、当時一線で活躍していた画家達が参加。渋沢栄一のような個人だけでなく、作品の題材にゆかりのある地方自治体や銀行、企業などが各作品の奉納者となった。

その中で、長秋は《地方官会議臨御》の制作を担当した。画題である地方官会議は1875(明治8)年に府知事や県令(現在の県知事)を集めた会議で、木戸孝允(1833-1877)が議長を務め、描かれた場面は開院式で明治天皇がおことばを述べられているところである。木戸孝允の親戚である木戸幸一(1889-1977)が本作の奉納者となった。

作品を制作するにあたり、絵画委員会からは地方官会議の参加者名簿やその配置図、写真など多くの関連資料が提供され、実物を写生する機会が与えられた。何度かの下絵持寄会で講評を受け、長秋は1928(昭和3)年1月、作品を完成させた。本作品は、現在も、聖徳記念絵画館で見ることができる。

本章では、円熟期を迎えた長秋がこの一大プロジェクトにどう取り組んだのか、残された資料から明らかにしていきたい。

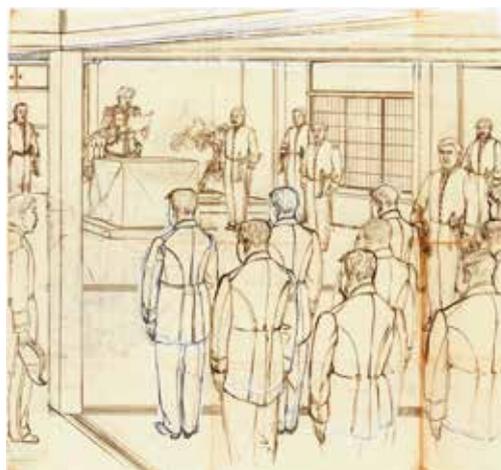


明治神宮外苑 聖徳記念絵画館
外観、展示室
聖徳記念絵画館



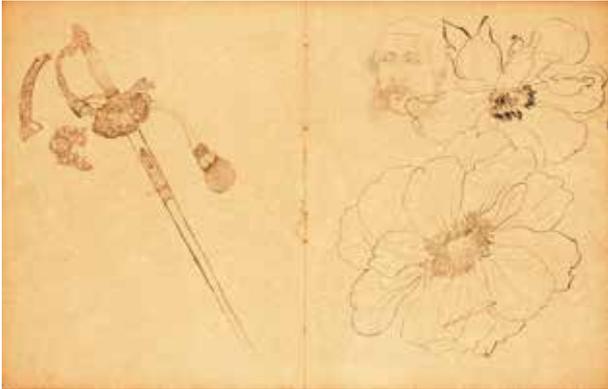
参考
磯田長秋
地方官会議臨御

1928(昭和3)年
聖徳記念絵画館



19
磯田長秋
《地方官会議臨御》下図

1926(大正15)～1928(昭和3)年 鉛筆・墨／紙
97.3 × 101.8 船橋市



20
磯田長秋
デッサン帳
1926(大正15)年
鉛筆・墨／紙
37.0 × 58.2(見開き)
個人蔵



21
磯田長秋
京都御所 写生図

1926(大正15)年3月25日
墨／紙
24.7 × 33.0
個人蔵



22
聖徳記念絵画館記念メダル
1926(大正15)年12月22日 径7.0 船橋市



聖徳記念絵画館にて
個人蔵

《地方官会議臨御》に描かれた人物は、絵画委員会から提供された写真をもとに描かれた。地方官会議が開催された1875(明治8)年に最も近い時期の写真が資料として提供され、デッサン帳には木戸孝允や大久保利通の姿がある。また、1926(大正15)年、関連資料を見学、写生する機会が与えられ、京都御所にて明治天皇が着用していた洋服、装束などを拝見した記録が残っている。デッサン帳のサーベル等はその際に描いたものと考えられる。

聖徳記念絵画館の絵画は巨大であるため、制作事業に参加した多くの画家が画室を改築、または新築した。長秋も同様に、この作品を制作するために家を建てたという。



23
聖徳記念絵画館 壁画集
明治神宮奉賛会 1937(昭和12)年発行 船橋市

明治神宮鎮座絵巻

長秋は聖徳記念絵画館の制作後、再び明治神宮に関わる仕事に携わる。

《明治神宮鎮座絵巻》は鎮座 20 年を期して、明治神宮の御料地の選定から鎮座にいたる盛儀や神殿造営など 27 場面を絵図と詞書で表したものである。1920(大正 9)年の鎮座祭に奉仕した一条宮司・鈴木権宮司の発案により、1923(大正 12)年から資料収集が開始され、1932(昭和 7)年 3 月、長秋が絵図制作の依頼を受けることとなった。考証・監修のもと、満 4 年を費やし、1936(昭和 11)年 6 月に絵図が完成した*¹。残された全ての場面の下図には、何度も描き換えた跡や、細かいメモが記されており、長秋の本作品に取り組み姿勢がうかがえる。

* 1 1940(昭和 15)年、明治神宮三代目宮司・有馬良橘によって詞書が浄書され、全てが完成した。



参考
磯田長秋
《明治神宮鎮座絵巻》
1936(昭和 11)年 6 月
明治神宮



24 磯田長秋
《明治神宮鎮座絵巻
第一 鎮座前御料地》下図
1932(昭和 7)～1936(昭和 11)年
鉛筆・墨・顔彩／紙 43.5 × 56.3 個人蔵



参考 磯田長秋
《明治神宮鎮座絵巻第一 鎮座前御料地》
1936(昭和 11)年 6 月
明治神宮



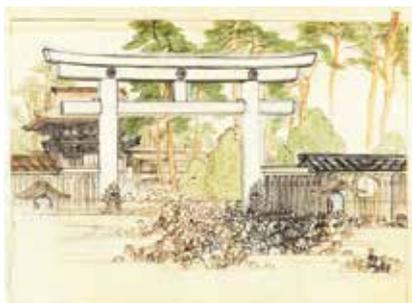
25 磯田長秋
《明治神宮鎮座絵巻
第二十 鎮座祭の四》下図(1)
1932(昭和 7)～1936(昭和 11)年
鉛筆・墨／紙 45.0 × 56.0 個人蔵



26 磯田長秋
《明治神宮鎮座絵巻
第二十 鎮座祭の四》下図(2)
1932(昭和 7)～1936(昭和 11)年
鉛筆・墨・朱／紙 45.5 × 59.3 個人蔵



参考 磯田長秋
《明治神宮鎮座絵巻第二十 鎮座祭の四》
1936(昭和 11)年 6 月
明治神宮



27(左) 磯田長秋
《明治神宮鎮座絵巻
第二十二 鎮座祭の六》下図
1932(昭和 7)～1936(昭和 11)年
鉛筆・墨・顔彩／紙 42.4 × 56.0 個人蔵

参考(右) 磯田長秋
《明治神宮鎮座絵巻
第二十二 鎮座祭の六》
1936(昭和 11)年 6 月 明治神宮

第4章 History painting 歴史画

「歴史画」とは、歴史的な出来事、人物を主題として扱う絵画を指す。「歴史画」が一つの絵画ジャンルとして成立した背景には、明治時代に行われた「国家」づくりに伴う「歴史」づくりと民衆の歴史への関心の高まりがある。明治維新から太平洋戦争終結までの近代に生きた人々に共有された「歴史」を表した絵画が長秋の「歴史画」と言える。彼はその「歴史画」の隆盛期に師・小堀鞆音や安田靉彦ら仲間達と出会い、歴史画家としての道を歩んでいった。

明治初頭、「美術」という概念が西欧から取り入れられた頃、「歴史」を表した絵画は浮世絵が中心であり、『太平記』や『源平合戦』など、大衆的な「歴史」は「物語」と重なっていた。次第に美術界では、国の目指す指針を絵画の中で表していくという政治的な動きが出てくる。歴史教育の一環としての「歴史画」が生まれ、ここでは「忠孝」といった教訓を伝える国の歴史イメージづくりが行われた。多く扱われた題材は日本武尊、菅原道真、紫式部、源義家、平家の滅亡、元寇、楠正成・正行などで、天皇や国家に対する忠誠を伝えるものである。

その後、明治30年代、「教訓」を伝えることを目的とせず、「概念」を表現し、「美術」「芸術」として格上げされた「歴史画」が現れてきた。この時期、美術団体の展覧会が増え、新聞などのメディアに展覧会評が掲載されることで、美術が国民の身近なものとなった。また、若い日本画家のグループがいくつも立ち上がり、作品を発表しはじめていた。そこで、歴史画を牽引していったのが紅兎会のメンバーである。彼らは歴史画を追究し、絵画のジャンルとして確立させ、展覧会で重要な位置を占めていった。

長秋が文展、帝展といった官展に出品した作品は、明治期に多く描かれていた題材と同様のものが多い。残された作品や注文記録も、そのことを示している。しかし、長秋の作品は単に教訓を示すような図像ではなく、歴史上の人物のたたずまいを鑑賞者に想起させるような情緒が漂っている。市が所蔵する《醍醐乃花見》(cat.no.28)は、豊臣秀吉が晩年に京都の醍醐寺で花見をする場面を描いたものであるが、本作からは、秀吉のまわりに流れる春の風が感じられるようである。

さらに、第3章で紹介した聖徳記念絵画館の壁画や同時代に起こった関東大震災の様子を描いた作品も、広い目で見れば、「歴史画」である。長秋の歴史画には、過去の歴史・物語の世界だけでなく、同時代の空気感が表されていると言えるだろう。



28
磯田長秋
醍醐乃花見
1937(昭和12)年
絹本着色
132.0 × 36.0
船橋市(清川コレクション)



北畠親房(1293-1354)は鎌倉時代末期から南北朝時代の公卿である。足利氏を中心とした武家政権に抗し、後醍醐天皇から信任を受けて南朝を支え、晩年には南朝の正統性と君主のあるべき姿を説いた歴史書『神皇正統記』を著した。

長秋は1940(昭和15)年、紀元二千百年奉祝展に《北畠親房脚》を出品している。《北畠親房》(cat.no.29)と同様の構図で描かれているが、出品作は武具の場所に蠟燭が置かれている。人物の周りに置かれたモチーフによって、北畠親房を「武人」あるいは「文人」いずれのイメージを印象づけるように表現しているかがわかる。

29
磯田長秋
北畠親房
制作年不詳
絹本着色
31.3 × 36.2
個人蔵



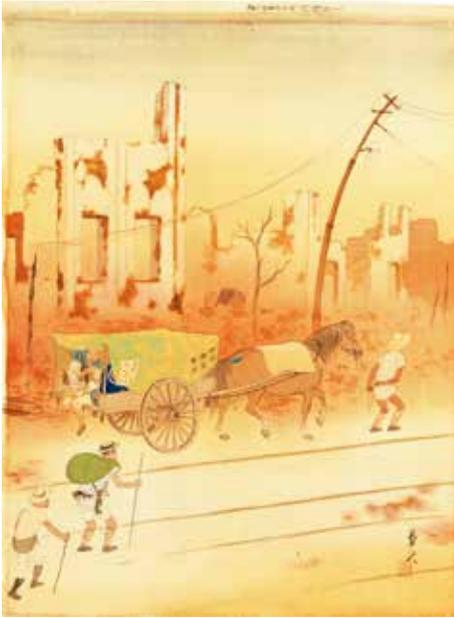
30
磯田長秋
(無題)

制作年不詳
絹本着色
32.8 × 46.2
個人蔵



31
磯田長秋
清少納言

制作年不詳
絹本着色
54.2 × 61.5
個人蔵



32

磯田長秋

大正震火災木版画集 運送馬車(京橋) 原画

1923(大正 12)～1924(大正 13)年

絹本着色

59.5 × 45.5

個人蔵

大正震火災木版画集

1923(大正 12)年の関東大震災から時を隔てず、画報社から『大正震火災木版画集』というシリーズ版画が刊行された*¹。これは、6人の日本画家が描いた震災の様子を版画にしたもので、長秋の作品も6点含まれている*²。

長秋が描いた題材は「輸送馬車(京橋)」「愛宕山にて」「路上の残骸(浅草)」「銀座裏(京橋)」「深川所見」「橋の袂(神田)」であり、「運送馬車(京橋)」の原画と考えられる本作には、瓦礫の中、家財道具を馬車で運び、避難する人々の姿が表されている。

版画集に収められている作品の原画の一部は、1923(大正 12)年10月31日から11月4日に東京・本郷の洋食屋、燕楽軒にて開催された「離騷社震災スケッチ展」で展示されている。この展覧会は、西澤笛畝(1889-1965)らが設立、長秋も参加していた研究会「離騷社」にて、「此際是非荒んだ市民の心を和らげる為、一方芸術復興の魁として、小品の展覧会を」*³開催する事が発案され、会員に限らず、竹久夢二(1884-1934)や洋画家の藤島武二(1867-1943)など多くの画家が賛同した。

展覧会の開催記録や版画は、当時の画家達が震災に対してどのように向き合ったのかを伝えている。

* 1 1924(大正 13)年1月から12月まで毎月3点の版画が予約販売され、後に全36図が一括販売された。

* 2 長秋の他に、西澤笛畝(1889-1965)、川崎小虎(1886-1977)、田村彩天(1889-1933)、桐谷洗鱗(1877-1932)が制作した。

* 3 西澤笛畝「離騷社生立の記」『藝術』第1巻第24号、1923年11月

牧童図

梅の花咲く早春の頃、のしりのしりと歩を進める牛と手綱をにぎり連れ添う子供。穏やかな雰囲気は何とも心和む。掛軸の作品でホルスタインを描くというのは珍しいが、牧童の衣が青いまだら模様なことと合わせて長秋の遊び心か。牛のそばに咲く梅、牧童の持つ竹鞭に、作品を囲む表具の松模様、3つ合わせて松竹梅の縁起物にも見える。鬘斗をかけている共箱の状態から長秋の親族による贈呈品であったことがうかがえ、上記の特徴も含め^{ことは}寿ぎの意図があった可能性も考えられる。

牧童という画題は、古くは中国の唐時代に確認ができる。この牛のいる田園の風景を楽しむ趣向は、日本では禪の教えを表す十牛図と重ね合わされることが多い。本作の図様は牛を飼いならした第五段階の「牧牛」に近いが、十牛図では牧人が牛を引いて家に帰る場面で、本作のように並び歩く図は確認できない。

長秋が活動した頃の牧童図は、近代日本画を築いた画家たちの描く、よき題材だった。十牛図の文脈よりも風景のなかにある牧牛と牧童に比重が置かれているように見える。西洋の風景画と出会った日本画家らは、新たな時代にも日本ならではの作品を描こうとし、東洋由来の牧牛をモチーフに選んだ。長秋においては、掛軸の形式や松竹梅の吉祥性から日本の伝統が、ホルスタインや構図の特性から、新時代の革新性が感じられる。



33

磯田長秋
牧童

1925(大正 14)年

絹本着色

35.0 × 41.8

個人蔵

第5章 船橋での磯田長秋

1922(大正11)年、長秋は船橋町九日市(現 船橋市本町)に居を構えた。1929(昭和4)年から1931(昭和6)年の1月まで一時的に東京に移り住むが、1947(昭和22)年に亡くなるまでの約25年間、船橋で生活した。

当時の船橋町(千葉県東葛飾郡)は1889(明治22)年、市制町村制の施行により旧五日市村、九日市村、海神村が合併して成立。面積は現在の船橋市の十分の一に満たない程であった。1927(昭和2)年の船橋町勢要覧では当時の船橋の様子を以下のように記している。

(前略)電信・電話・電燈の設備全く。魚介の水産物多く交通繁く商業殷賑なる事是亦郡内第一なり。本町は海岸一帯砂浜にして遠浅なれば貝類の養殖盛んに行はれ、又汐干狩海水浴場として海浜一帯其設備に勤めつつあり。^{*1}

明治以降、総武鉄道(現 JR)、京成電気軌道(現 京成電鉄)、北総鉄道(現 東武鉄道)といった鉄道が開通し、昭和初期の船橋町は東京の近郊都市として近代化が進み、海岸部は海水浴客で賑わっていた。1937(昭和12)年、2町3村(船橋町・葛飾町・八栄村・法典村・塚田村)が合併し、船橋市が誕生。益々発展していくこととなる。長秋は、この発展段階の船橋に暮らし、多くの作品を生み出した。

遺族のもとに残された資料からは、船橋の人々とのつながりが見えてくる。資料の一つである「昭和八年磯田長秋画伯作品頒布会」の記録には、割烹旅館「玉川」で開催された作品頒布会にて長秋の作品を求めた人物として、船橋の医師や商家の旦那衆、町議会議員や後の市長など、町の名士たちが名を連ねている。

そこには船橋で医業を営んでいた清川弘道の名も存在する。船橋市所蔵作品の核となる清川コレクションには長秋の作品が3点含まれているが、長秋と清川家の関係について研究を進めることは、作品のみならず、コレクション全体の理解を深めることにつながるであろう。

また、長秋の24年分の日記が残されている。その大部分が船橋での日々の暮らしを綴ったものである。起床した時間から家族とのやり取り、作品の制作過程など、画家の日常について事細かに記されている。この日記からは、多くの画家仲間が長秋のもとを訪れ、割烹旅館「玉川」で宴会を行い、ある時は船橋尋常高等小学校(現 船橋市立船橋小学校)で展覧会を開催するなど、船橋における画家たちの活動を知ることができ、地域の美術コミュニティの広がりが感じられる。

本章では、長秋の作品・資料を通して、大正から昭和にかけての船橋の文化活動の様子を見ていきたい。

*1 船橋町勢要覧(昭和2年)

2020(令和2)年、長秋の日記が遺族から船橋市に寄贈された。現存する24冊のうち、一番早い時期の日記は長秋が35歳であった1915(大正4)年のもので、1947(昭和22)年の日記には、亡くなる2か月前までの記載がある。長秋はほぼ毎日、起床から就寝までの行動を事細かに記している。そして、作品の依頼や制作過程、家族・知人や他の画家とのやり取りなどの記載も詳しい。

この日記は、長秋の画業を明らかにするだけでなく、画家の生活の様子、船橋の人々の営みを知ることができる貴重な資料である。現在、船橋市では地域史研究につなげる試みとして、美術担当学芸員と歴史担当学芸員が共同して日記の調査を進め、多角的なアプローチを行っている。



34
磯田長秋 日記(全24冊)

大正4, 5, 10, 13, 14, 15年,
昭和4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22年
船橋市



清川家との関係

本町で医業を営んでいた清川家が三代にわたり収集・保存してきた美術品 184 点が 1999(平成 11)年から 2000(平成 12)年にかけて船橋市に寄贈され、清川コレクションとして収蔵された。

清川コレクションには、長秋の作品が 3 点収められている。その一つである《高砂》(1920 年)には、清川家で毎年正月に床の間に飾られていたというエピソードがある。高砂という画題は当時、吉祥図として親しまれており、長秋も本画題の注文を多く受けていたようである。

長秋の日記には、二代目の清川弘道(1882 - 1961)の名が多く現れ、互いの家を行き来するような親しい間柄であったことがわかった。長秋の研究を進めることは、清川コレクションの理解を深めることにつながるだろう。

35(左)
磯田長秋
高砂

1920(大正 9)年
絹本着色
145.0 × 50.3
船橋市
(清川コレクション)

36(右)
磯田長秋
紙雛

制作年不詳
絹本着色
121.5 × 38.2
船橋市
(清川コレクション)

長秋の日記からは、長秋(磯田家)と清川家が、作品に関するやり取りだけにとどまらない関係を結んでいたことがわかる。

例えば、日記の 1925(大正 14)年 2 月 25 日の部分には、

日暮頃清川弘道氏三子ノ転学ニ付、知人ヨリ教科書モ借用シテ、態々来ラレ、玄関ニテ種々話サレ、且明晩菅野ニ居ラル、七中ノ図画ノ先生ヲ訪問ス可、同伴ストノ事ニテ約束シ別ル

翌 26 日の部分には、

夜食後第七中ノ先生ヲ訪問スベク、清川医士殿ヲ訪問、同氏ト共ニ車夫ヲ案内ニシテ、清川方ヲ七時半頃出、菅野迄電車デ至リ、内野ト云第三中ノ先生ニ面会、七中ノ先生ハ既ニ就寝後トテ、万事ヲ内野先生ニ頼ミ帰宅ス

という記載がある。

「七中」とは、東京府南葛飾郡寺島町(現墨田区)にあった東京府立第七中学校(旧制)のことであろう。当時の同校には、千葉県からの越境入学者もいたことが知られている。



割烹旅館「玉川」

割烹旅館「玉川」は、1921(大正10)年から現在の船橋市湊町で料亭の営業を始めた。海岸の埋め立て以前には、目の前に広がる海を臨みながらの宴会が開かれていた。埋め立てが進み、海岸が遠のいた後も、大勢の人が集まる宴会や結婚披露宴などが執り行われていた。

そんな玉川に、長秋も足繁く通っていたことが日記に記されている。例えば、この頁の下部で紹介している1925(大正14)年の日記には、玉川を会場とした33名の会合に参加していたことが記されている。

長秋が描いた《富士図》は玄関の正面に飾られ、閉館の日まで多くの来館者を出迎えていた。《富士図》が玉川に飾られるようになった経緯は現時点では解明できていないが、玉川には児玉輝彦や小金谷春嶺など、大正末から昭和初年に船橋周辺で活躍した日本画家の作品が飾られており、たびたび玉川を利用していた長秋の作品が残されたことは、自然な流れである。富士山という画題は日本的モチーフとして当時、全国的に流行していたものであるが、海越しに富士山を臨む船橋の旅館を飾るのにふさわしい作品であっただろう。

玉川は2020(令和2)年4月30日に閉館。《富士図》は玉川から寄贈を受け、現在、船橋市が所蔵している。



割烹旅館「玉川」外観 2020(令和2)年



割烹旅館「玉川」玄関 2020(令和2)年



37

磯田長秋

富士図

制作年不詳 絹本着色

55.0 × 173.0 船橋市



長秋の日記からは、大正末から昭和初めの頃の玉川が、画家や文化人たちが集う場の一つになっていたことがわかる。1925(大正14)年11月22日の記載を引用しよう。

笠原ノ分一枚稚ナ武士ノ墨描ヲス、時刻来リ玉川ニ至ル、市川モ来リ、共ニ玉川ニ於ケル集会三十三名盛會デアル、二次会ニ残ル者十二人、十二時過ギ帰途ニ就キ寝ル但シ来會者ノ厚意ニ報ユル為、芸者六人ヲ自分ガ持ツ

「盛会」「二次会」「芸者」など、会合の雰囲気を感じ取れる記述である。家の近くに玉川があったことは、長秋の画業や交際関係にも、影響を与えたといえるだろう。



38
昭和八年七月
磯田長秋画伯作品頒布会
1933(昭和8)年7月
27.7 × 19.7 個人蔵

1933(昭和8)年8月19日、「磯田長秋画伯作品頒布会」が玉川で開催された。写真の資料に収録された同年7月付けの「趣旨」と「会規」からは、頒布会の概容を知ることができる。頒布会は会費制で、長秋の他、山川永雅らが揮毫した色紙が景品として贈呈されたようである。事務所は船橋町九日市に置かれ、出席者の多くは地元の名士(医師・商家・議員など)である。前述した清川弘道の名前も見える。土曜日午後1時に開会し、数名の画家が「席画」を披露し、「晩餐」として粗酒飯を提供する40名規模の頒布会。その会場としてどこがふさわしいかと考えた時に、玉川が浮かび上がったのだらう。

1933(昭和8)年8月19日の日記の記事を確認すると、頒布会当日の長秋や出席者の様子を具体的に知ることができる。

朝食後床ヤニ至り顔ヲ剃ル、叶ヤエ至り、正午ニ鳥光児玉氏等ト共ニ自動車デ玉川エ行ク約束ヲシ帰宅、染谷来ル、正午染谷ヲ伴イ自宅ヲ出、叶ヤニ至り、五人自動車ニテ玉川エ至ル(略)二時半頃ヨリ席上揮毫始マル、会員集マリ、夕刻席画終リ、宴会ニ移ル、十時頃会員全部退散、席画ノ四氏ト川端玉雪鳥光ハ二次会ヲヤル

なお、7月時点の資料では、席画の予定者として3名の画家の名前の後に「他二名未定」と記されている。20頁に引用した1925(大正14)年11月22日と同様に、長秋が玉川での会合の前に床屋へ行ったのは、頒布会が、船橋の文化人たちが集う社交の場でもあったからだろう。

こだま てるひこ 児玉輝彦(1898-1992)

長秋の日記からは、画家達とのつながりが見えてくる。なかでも頻繁に登場するのが、児玉輝彦という人物の名である。

児玉輝彦は、新潟県に生まれ、画家を志し、1917(大正6)年、同郷の歴史画家・津端道彦(1868-1938)に師事した。1927(昭和2)年第八回帝展で《祇王》が入選。後に日本美術協会会員となり、展覧会で受賞を重ね、委員や審査員を務めた。

1926(大正15)年から船橋町に居住し、1943(昭和18)年に意富比神社(船橋大神宮)の杉戸《頼朝政子図》を制作。1986(昭和61)年には、市内の御瀧不動尊に格天井画と仏画を奉納した。また、船橋市美術連盟の立ち上げメンバーに加わるなど、地域の文化・芸術活動に足跡を残している。

日記からは、輝彦が長秋宅を度々訪れ、制作に関する助言を受け、長秋の仕事を手伝うなど、二人の師弟のような関係とその交流がうかがえる。



39
児玉輝彦 梅
制作年不詳
紙本着色(色紙)
27.0 × 24.0
船橋市



40
児玉輝彦
八幡太郎義家
制作年不詳
絹本着色
35.0 × 91.6
船橋市

意富比神社(船橋大神宮)



41

磯田長秋

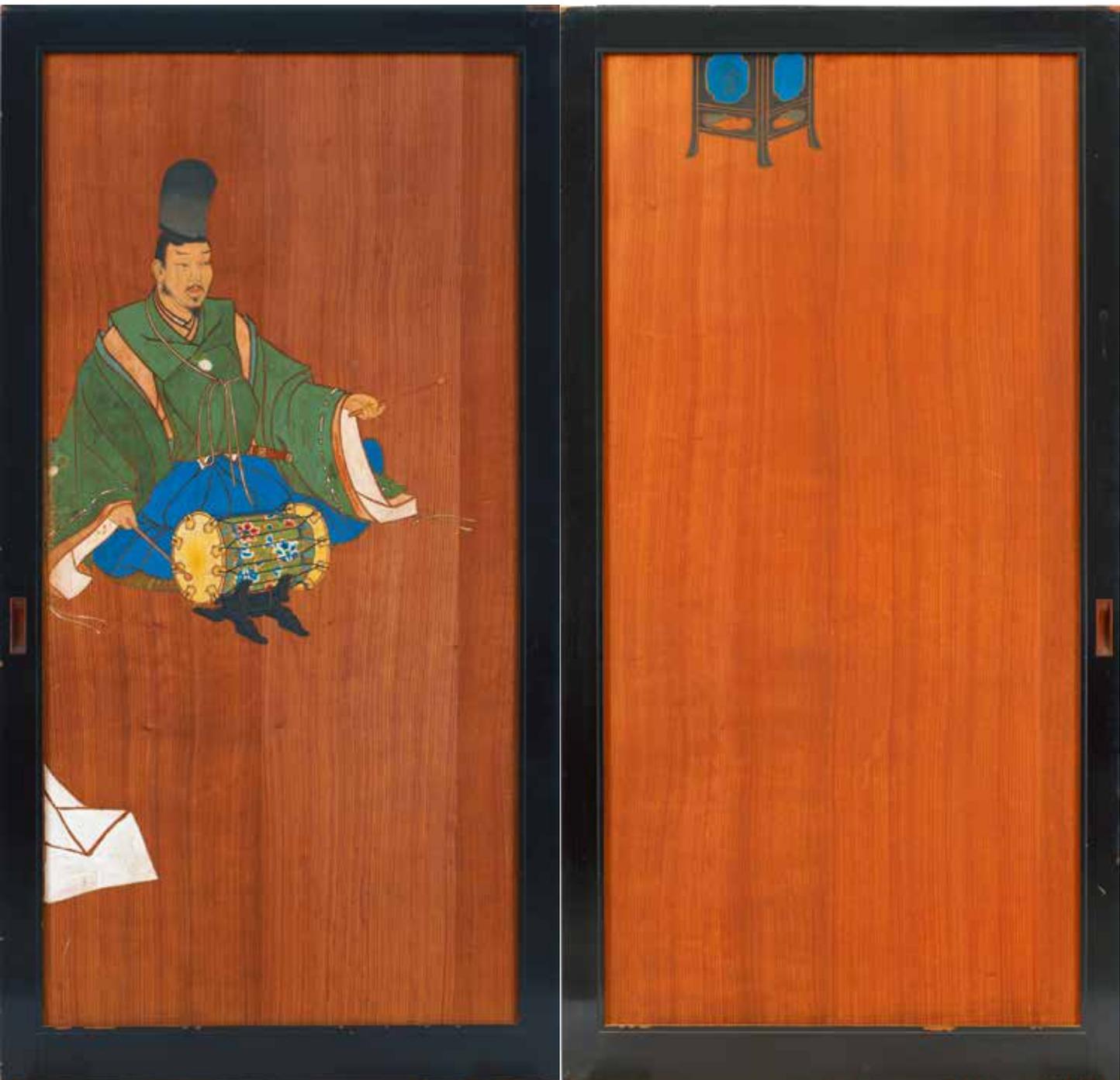
静御前

1943(昭和18)年

杉戸4枚

176.0 × 91.0 × 3.5(1枚)

意富比神社(船橋大神宮)





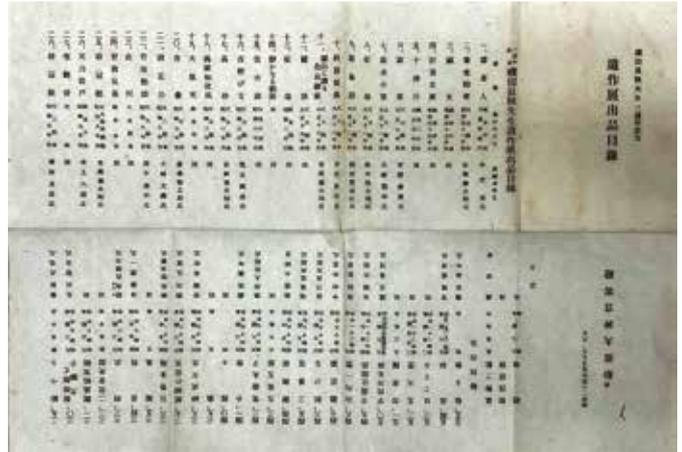
42
磯田長秋
徳川家康
制作年不詳
紙本着色
127.2 × 30.7
意富比神社(船橋大神宮)

船橋市宮本にある意富比神社は、「船橋大神宮」として親しまれ、正月には多くの参拝者で賑わう船橋を代表する社である。

日本武尊が東国平定の際、当地で祈願したことが始まりであると伝えられる。江戸時代には徳川家康が社領の寄進や社殿の造営・改修を行なったと伝えられている。

近所に住んでいた長秋もまた頻繁に足を運んでいた。参拝に訪れるだけでなく、1943(昭和18)年、静御前を描いた杉戸を奉納。その他にも、意富比神社にゆかりのある日本武尊の版木や徳川家康を表した掛軸を納めている。

1949(昭和24)年、長秋没後三周年記念として船橋大神宮の客殿で遺作展が開催された。この展覧会には杉戸《静御前》や遺族が所蔵していた作品のほか、「磯田長秋画伯作品頒布会」の名簿に名前のある人達などが出品している。残された出品目録からは、長秋の作品が、地域の人々の暮らしに根付いていたことが推察される。



43
磯田長秋先生 三週年記念 遺作展出品目録

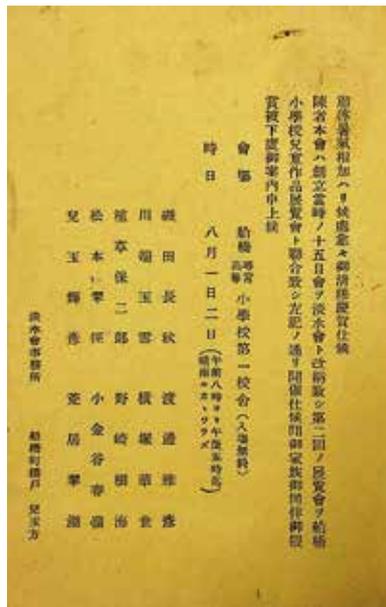
1949(昭和24)年5月7、8日
26.7 × 39.5 個人蔵



44
磯田長秋
日本武尊
制作年不詳
版木
90.2 × 34.7 × 4.2
意富比神社
(船橋大神宮)

この葉書は、鎌ヶ谷市の旧家である澁谷家に残されていたもので、1935(昭和10)年8月1日、2日に船橋尋常高等小学校(現 船橋市立船橋小学校)の校舎にて、長秋を含む画家達の展覧会を開催する案内である。長秋の他に、兄玉輝彦や船橋市の収蔵作家・川端玉雪、鎌ヶ谷に住み長秋から画の指導を受けていた小金谷春嶺らが淡水会会員として出品者に名を連ねている。彼らの作品は、割烹旅館「玉川」に残されており、玉川が会員達の集いの場として利用されていたことがうかがえる。

また、この展覧会には児童の作品も併せて展示された。当時、長秋の息子が在学していたことが展覧会を小学校で開催した理由の一つとして考えられるが、地域の人々と画家たちのつながりの一端を知ることができる貴重な資料である。



45 淡水会第二回 展覧会 案内状

1935(昭和10)年
7月28日(消印)
葉書 14.0 × 9.0
鎌ヶ谷市郷土資料館



46
磯田長秋 扇面図
制作年不詳 紙本着色 21.0 × 46.0 木村昌弘 / Masahiro Kimura

磯田長秋と家族

遺族のもとに残された作品からは、長秋の家族への深い愛情を感じることができる。長秋の子供たちのうち、3人の息子は出征している。《観音図》は長男・延年が戦地に赴く時のお守りとして描かれたもので、「(長秋は)これを描いた時、小さくて描きにくいとこぼしていた」と伝えられている。

お絵描きをする子供と、その姿を見つめる女性を描いたデッサンは、三男・光海と妻・きよである。この絵からは、描いている長秋の姿まで目に浮かび、微笑ましく感じられる。



47
磯田長秋 親子の図
制作年不詳 紙本着色
14.4 × 20.7 個人蔵



48
磯田長秋
観音像
1941(昭和16)～
1943(昭和18)年頃
絹本着色
9.5 × 7.6
木村昌弘 /
Masahiro Kimura

磯田長秋「忘恩の徒」

はじめ狩野派の先生について絵を習ひました。ところが一年程するとその先生が不幸にして盲目になりました。でその先生の紹介で雅邦先生の処へ参りましたが、事情の為思うやうにならず、亦その盲目の先生のお骨折りで小堀先生の御薫陶を受けることになりました。小堀先生は弟子を我子のやうに愛されて、それだけに仕事に対しては厳格でありもしました。私が先生の処に入門して間もなく一ヶ月位は経つておりましたか、何処か地方の展覧会に出品することになりました。制作をはじめましたが、それ迄古実について少しの研究もしてゐない、鎧についてどうか、有識についてどうかをまるで知らない、私でしたので、武者絵どころの沙汰ではなかつたのですが、装束甲冑図解かなんかを頼りに一枚の武者絵を描くことにしました。その下図が出来ておそろへ先生にお見せしたのです。ところが先生は私の絵を見るなり非常に憤慨せられました。こんな出駄羅目な武器を描いて、それで将来を歴史画に託すつもりなのか、花鳥画家にでも庫替へしたらどうだ。高橋玉淵に添書を書いてやるから、その弟子となつて花鳥を描け、とかうです。私は全く弱つてしまひました。京橋の大根河岸の兄の家から、根岸の先生のお宅迄、毎日通つておりましたが、其翌日からは先生のお宅へ伺つても、先生は顔を見せても下さらない、やれお顔を見たと思へば、一瞥を与へられるだけで唇は重く閉ざされて私の為めには開かれない。玄関傍の三畳の部屋に、弁当をかゝえてしよんぼり私は毎日座つておりました。三日間、涙ぐんで考へこんでゐた三日目に、お前どうしても歴史画をやつてみるつもりか、そんならばもつと真剣になつて勉強しなければいけない、とやつと先生は口を切つて下さいました。今と違つてあの頃は、習ふ方も教へる方も全く真剣であつたと、先生の奥さんが、時たま思出すやうに私におつしやいますが、全くその通りでした。私が入門した年の春、安田鞞彦さんが同門の一人に加はつて居られて共に弁当を持つて通学したものです。何しろあれだけになる人ですから、その時分から実に秀才でした。色々直接間接に安田さんの教へを受けま

した。云はず語らずの中にどれだけ鞭達を受けたか解りません。未だに何くれとなく君によつて啓発されるところが多いのであります。紫紅会を君がおこされて、自分や山川永雅さん小山栄達さんなど、同門の人達が重になつて、最初は根岸御陰殿の安田さんの宅に集つて研究会をやつたものですが、追々に進展して京橋区の鍛冶橋の前の貸席で展覧会をやることになりました。その中に今村紫紅さんや石川さんなどが入つてこられて、紫紅会では今村さんと同名になるので紅児会と改めました。研究会も実に盛んで皆熱心なものでした。新聞ザラなんか立派な製作をしてくるといつた有様でした。元気もありました。今の東京市役所の明地へ行つてよく角力を取つたものです。遠足をしたり、小旅行を^(ママ)心みたり、専ら安田さんが先導になつてやられました。この会も常磐木倶楽部でやるやうになつてから、小林古径さん、前田青邨さんが来られるやうになり、最後になつて速水御舟さんなども入れられました。こんなふう懐古しますと私が可細くも今日あるは、友人安田鞞彦さんのたまものであり、紅児会時代の今村紫紅さんその他の諸氏の激励の所以と思ひます。故に安田さんが居なかつたらまるで私は形なしであつたゞろうと思つております。此処にひたすら自分が心苦しく思つてゐますのは、安田さんが美術院に立籠つて万丈の気を吐いておられるに引かへて、帝展で御覧の通り意気地のない私であることです。これはまことに小堀先生に対して報恩の一部もなさないことと申訳なく思つております。只川船水掉君が今年は同門を負つて立つて気をはいて呉れたことをせめてもの心やりとしてゐる次第なのです。ともかくかうして自らを省みるにつけ、先人の偉業にいつも襟を正すものがあります。彼我の間隔に余りに遥けきを知ると、そゞろ凡愚の己に悲哀を感じます。せめて愚人の一徹をとひそかに念じながら蝸牛の歩みを続けて参らうと思つております。

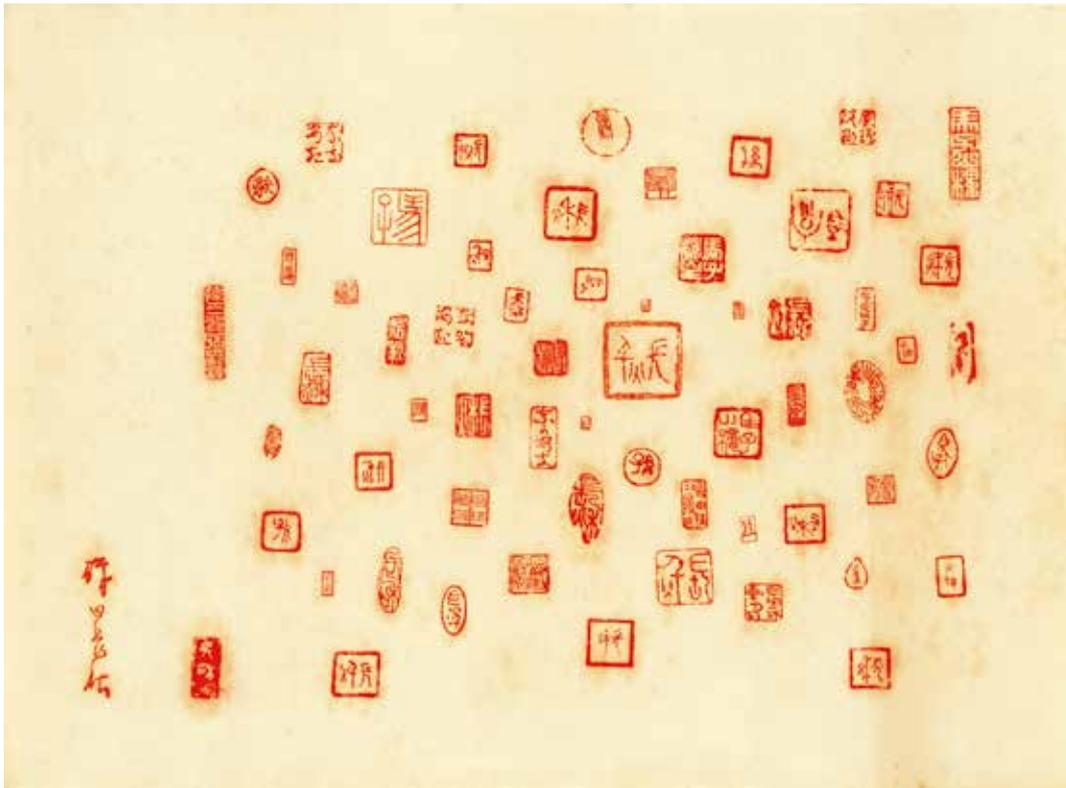
磯田長秋「忘恩の徒」『巽』(二月 長秋号 笛吹号)
第3巻第2号、1930年1月

磯田長秋 略年譜

本年譜では2022年10月末までに判明した磯田長秋に関する主な事項を記載した。

| 西暦 | 和暦 | 年齢 | 磯田長秋に関する出来事 | 日本、船橋の主な出来事 |
|------|------------|-----|---|--|
| 1872 | 明治5年 | | | 鉄道開業。／船橋尋常高等小学校(現・市立船橋小学校)開校。 |
| 1873 | 明治6年 | | | 明治天皇が大和田原で近衛兵の演習を観閲、「習志野ノ原」と命名。 |
| 1875 | 明治8年 | | | 東本願寺書院(浅草)にて地方官会議開催。 |
| 1880 | 明治13年 | | 5月5日 内田孫三郎(長秋)は内田彦右衛門の長男として東京市日本橋区新和泉町3番地に生まれる。 | |
| 1889 | 明治22年 | 9歳 | 磯田家の養子となる。 | |
| 1894 | 明治27年 | 14歳 | | 総武鉄道(市川～佐倉)開通(現JR)・船橋駅開設。／日清戦争(～1895) |
| 1897 | 明治30年 | 17歳 | 小堀鞆音に師事する。 | |
| 1898 | 明治31年 | 18歳 | 同門の安田毅彦、小山栄達、山川永雅ら8名と研究会、紫紅会を結成。 | |
| 1900 | 明治33年 | 20歳 | 10月 紫紅会に今村紫紅が入会し、会の名前を紅児会と改める。 | |
| 1902 | 明治35年 | 22歳 | 1月 小堀鞆音の主唱によって設立された歴史画風俗画研究会(歴史風俗画会)に参加。 | |
| 1904 | 明治37年 | 24歳 | 7月19、20日 紅児会第一回展覧会(常盤木倶楽部、日本橋・東京)開催。 春、第一回歴史風俗画展覧会に《大塔宮》を出品、銅牌を受領。 秋、第二回歴史風俗画展覧会に《大井川行幸図》を出品、三等賞銅印を受領。 | 日露戦争(～1905) |
| 1905 | 明治38年 | 25歳 | 3月 第三回歴史風俗画展覧会に《吉野の静》を出品、銅印を受領。 | |
| 1906 | 明治39年 | 26歳 | 1月 紅児会員十数名で江戸島、鎌倉に遊ぶ。 | |
| 1907 | 明治40年 | 27歳 | 10月25日～11月30日 第一回文部省美術展覧会(上野公園内元東京勲業博覧会美術館)に《楠正成》を出品。 | |
| 1910 | 明治43年 | 30歳 | 第10回文部省美術展覧会に《武将》を出品、三等賞銅牌を受領。 | |
| 1912 | 明治45年／大正元年 | 32歳 | 2月 小堀鞆音門下により革丙会が発足する。 第六回文部省美術展覧会(10月12日～11月17日 竹ノ台陳列館、上野・東京、11月23日～12月2日 京都市立絵画専門学校)に《宴》を出品、褒状を受ける。 | |
| 1913 | 大正2年 | 33歳 | 8月24日 紅児会を解散する。 第七回文部省美術展覧会(10月15日～11月18日 竹ノ台陳列館、上野・東京、11月25日～12月4日 岡崎公園第2勲業館、京都)に《水と陸》を出品、褒状を受ける。 | |
| 1914 | 大正3年 | 34歳 | 第八回文部省美術展覧会(10月15日～11月18日 東京大正博覧会美術館跡、11月25日～12月9日 岡崎公園第2勲業館、京都)に《参籠》を出品。 | 第一次世界大戦(～1918) |
| 1915 | 大正4年 | 35歳 | 第九回文部省美術展覧会(10月14日～11月14日 竹ノ台陳列館、上野・東京、11月21日～12月10日 京都市立絵画専門学校、京都市立美術工芸学校)に《住の江》を出品、三等賞を受領。 | |
| 1916 | 大正5年 | 36歳 | 第十回文部省美術展覧会(10月14日～11月20日 竹ノ台陳列館、上野・東京、11月27日～12月10日 岡崎公園勲業館、京都)に《富士經ヶ嶽》を出品。 | 京成電気軌道(中山～船橋)開通(現京成電鉄)。 |
| 1917 | 大正6年 | 37歳 | 第十一回文部省美術展覧会(10月16日～11月20日 竹ノ台陳列館、上野・東京、11月27日～12月11日 岡崎公園第2勲業館、京都)に《架橋》を出品。 | |
| 1918 | 大正7年 | 38歳 | 第十二回文部省美術展覧会(10月14日～11月20日 竹ノ台陳列館、上野・東京、11月27日～12月11日 岡崎公園第2勲業館、京都)に《大茶の會》を出品。 | |
| 1919 | 大正8年 | 39歳 | 第一回帝國美術院美術展覧会(10月14日～11月20日 竹ノ台陳列館、上野・東京、11月27日～12月11日 岡崎公園第2勲業館、京都)に《大塔宮》を出品。 | 3月 明治神宮聖徳記念絵画館起工。 |
| 1920 | 大正9年 | 40歳 | 第二回帝國美術院美術展覧会に《雨に煙る湊》(10月16日～11月22日 竹ノ台陳列館、上野・東京、11月29日～12月13日 岡崎公園第2勲業館、京都)を出品。 | |
| 1921 | 大正10年 | 41歳 | 第三回帝國美術院美術展覧会(10月14日～11月20日 竹ノ台陳列館、上野・東京、11月27日～12月11日 岡崎公園第2勲業館、京都)に《吉水の聖》を出品。 | 割烹旅館「玉川」開業。 |
| 1922 | 大正11年 | 42歳 | 東京から船橋町に移り住む。 第四回帝國美術院美術展覧会(10月14日～11月20日 竹ノ台陳列館、上野・東京、11月27日～12月11日 岡崎公園第2勲業館、京都)に《東北の靄》を出品。 | |
| 1923 | 大正12年 | 43歳 | 10月31日～11月4日 離騷社震災スケッチ展(燕樂軒・水道橋・東京)に《暮る、銀座裏》(銀座の夜、供養)を出品。 | 9月1日 関東大震災。／北総鉄道(船橋～柏)開通(現東武鉄道)。 |
| 1924 | 大正13年 | 44歳 | 第五回帝國美術院美術展覧会(10月15日～11月20日 竹ノ台陳列館、上野・東京、11月27日～12月11日 岡崎公園第2勲業館、京都)に《浅宵》を出品。 | |
| 1925 | 大正14年 | 45歳 | 第六回帝國美術院美術展覧会(10月16日～11月20日 竹ノ台陳列館、上野・東京、11月27日～12月11日 岡崎公園第2勲業館、京都)に《陸奥靈山に據る北畠顯家》を出品。帝國美術院展覧会委員となる。 | |
| 1926 | 大正15年／昭和元年 | 46歳 | 3月25日 京都御所にて明治天皇が着用していた洋服、装束などを拝観。 5月20日 憲法記念館での日本画部下絵持寄会に出席。《地方官会議臨御》の下絵を提出する。午食後、絵画館を見学する。午後6時から丸ノ内日本工業倶楽部での懇談労働餐会に、招待される。(揮毫者・奉納者らが参加) 5月21日 宮内省内匠寮監理課にて明治天皇が着用していた洋服を拝観、写生する。 5月22日 内閣費助局にて勲章、印章を拝観、写生する。 7月15日 憲法記念館での第二回日本画部下絵持寄会に出席。 第七回帝國美術院美術展覧会(10月16日～11月20日 東京府美術館、11月27日～12月11日 岡崎公園第2勲業館、京都)に《背戸の小川》を出品。 | 洋画家・椿貞雄が船橋尋常高等小学校の図画教員となる。(～1928) |
| 1927 | 昭和2年 | 47歳 | | 10月 聖徳記念絵画館完成。 |
| 1928 | 昭和3年 | 48歳 | 1月 聖徳記念絵画館に《地方官会議臨御》を納める。 | 「三田浜楽園」が開業、中山競馬場が現在地(古作)に移転。／洋画家・椿貞雄が船橋町九日市へ転居。 |
| 1929 | 昭和4年 | 49歳 | 第十回帝國美術院美術展覧会(10月16日～11月20日 11月27日～12月11日 岡崎公園第2勲業館、京都)に《信長が訪れた元信の家》を出品。 秋 東京へ転居。 | 船橋と周辺は塩田廃止。 |
| 1930 | 昭和5年 | 50歳 | 2月 『巽二月長秋号笛歌号』に「忘恩の徒」を寄稿。 9月 石井林響の旧制千葉中学校の同級生米本信吾らが主宰していた俳句雑誌「土筆」の「石井林響追悼号」に追悼文を寄稿。 第十一回帝國美術院美術展覧会(10月16日～11月20日 東京府美術館、11月27日～12月11日 岡崎公園第2勲業館、京都)に《玉のうてな》を出品。 | |
| 1931 | 昭和6年 | 51歳 | 1月 船橋町本町へ転居。 第十二回帝國美術院美術展覧会(10月16日～11月20日 東京府美術館、11月27日～12月11日 岡崎公園第2勲業館、京都)に《刺繡》を出品。 | 満州事変 |
| 1932 | 昭和7年 | 52歳 | | 五・一五事件 |
| 1933 | 昭和8年 | 53歳 | 8月19日 磯田長秋画伯作品頒布会(玉川旅館)開催。 第十四回帝國美術院美術展覧会(10月16日～11月20日 東京府美術館、11月27日～12月11日 大札記念京都美術館)に《上杉謙信》を出品。 | |
| 1935 | 昭和10年 | 55歳 | 8月12日 淡水会第二回展覧会を船橋小学校児童作品展覧会と連合し開催。(船橋尋常高等小学校第一校舎) | 文豪・太宰治が船橋で暮らす。(～1936) |
| 1936 | 昭和11年 | 56歳 | 4月 明治神宮聖徳記念絵画館完成祝賀式典出席。 昭和十一年文部省美術展覧会招待展(11月6日～11月23日 東京府美術館、12月1日～15日 大札記念京都美術館)に《剛毅之座》を出品。 | 二・二六事件 |
| 1937 | 昭和12年 | 57歳 | 明治神宮に《明治神宮鎮座絵巻》を納める。 | 船橋町・葛飾町・八条村・法典村・塚田村が合併し船橋市が誕生(人口4.3万人)／日中戦争(～1945) |
| 1939 | 昭和14年 | 59歳 | 第三回文部省美術展覧会(新文展)(10月16日～11月20日 東京府美術館、12月1日～15日 大札記念京都美術館)に《熊谷父子》を出品。 | |
| 1940 | 昭和15年 | 60歳 | 紀元二千六百年奉祝美術展覧会(10月1日～22日(前期)11月3日～24日(後期) 東京府美術館、11月3日～17日(前期)12月3日～17日(後期) 大札記念京都美術館)に《北畠親房卿》を出品。 | |
| 1941 | 昭和16年 | 61歳 | | 太平洋戦争(～1945) |
| 1942 | 昭和17年 | 62歳 | 3月19日～22日 軍用機献納作品展(三越、日本橋)に《襲寇敵船》を出品。 第五回文部省美術展覧会(新文展)(10月16日～11月20日 11月29日～12月13日 大札記念京都美術館)に《夜襲》を出品。 | |
| 1943 | 昭和18年 | 63歳 | 意富比神社(船橋大神宮)に杉戸《静御前》を納める。 11月25日～12月15日 文部省戦時特別美術展覧会(東京都美術館)に《河野通有遙かに望敵船》を出品。 | |
| 1945 | 昭和20年 | 65歳 | | 終戦 |
| 1947 | 昭和22年 | 67歳 | 10月25日 磯田長秋没。 | 新制中学校が開校。／新京成電鉄(新津田沼～薬園台)開通(1955全線開通)。 船橋と周辺の海岸、埋め立てが始まる。 |
| 1949 | 昭和24年 | | 5月7、8日 磯田長秋先生三週年記念遺作展(船橋大神宮客殿)開催。 | |
| 1978 | 昭和53年 | | 11月5～12日 第七回文化財展 磯田長秋遺作展(船橋市郷土資料館2階)で開催。 | |

磯田長秋 印譜



49
磯田長秋 印譜
38.3 × 51.9
個人蔵

主要参考文献

次の通り項目を分け、それぞれ年代順に配列した。
自筆文献、関連文献Ⅰ 単行図書、関連文献Ⅱ 逐次刊行物、関連文献Ⅲ 展覧会図録

自筆文献

「土佐絵の将来」『絵画清談』第6巻2月号、1918年2月
「忘恩の徒」『巽』〈二月 長秋号 笛吹号〉第3巻第2号、1930年2月
「(無題)」『土筆』第4巻9号、1930年9月

関連文献Ⅰ 単行図書

竹田道太郎『画壇青春群像』雪華社、1960年
明治神宮編『明治神宮叢書 第二十巻 図録編』国書刊行会、2000年
山梨俊夫『描かれた歴史 日本近代と「歴史画」の磁場』ブリュッケ、2005年
針生一郎他編『戦争と美術 1937-1945』国書刊行会、2007年
今泉宜子『明治神宮「伝統」を創った大プロジェクト』新潮社、2013年
小堀桂一郎『ミネルヴァ日本評伝選 小堀鞆音—歴史画は故実に拠るべし—』ミネルヴァ書房、2014年
明治神宮外苑編『聖徳記念絵画館オフィシャルガイド～幕末・明治を一望する～』東京書籍、2016年

関連文献Ⅱ 逐次刊行物

西澤笛吹『離騷社生立の記』『離騷社震災スケッチ展』『藝術』第1巻第24号、1923年11月
金井紫雲『甲冑の名作揃ひ』『美之國』第6巻第2号、1930年2月
野田九浦『持味の豊かな作家』川船水榭『沈黙・温情』伊東紅雲『温情の主』
町田曲江『常識家』『巽』〈二月 長秋号 笛吹号〉第3巻第2号、1930年2月
棚田曉山『甲冑着用式』『美之國』第6巻第3号、1930年3月
大口理大『歴史画に就いて』『現代美術』第2巻第1号、1935年
河北倫明『紅児会略史』『美術研究』第160号、1951年3月
上原いづみ『明治期歴史教育における「歴史画」の研究—検定教科書の挿絵分析を通して—』『筑波社会科研究』第21号、2002年
井戸美里『「歴史画」における有職故実と図案教育—高伝来の「歴史画」をめぐって—』『五浦論叢：茨城大学五浦美術文化研究所紀要』第25号、2018年
金谷徹『近代日本の元寇図と〈蒙古襲来絵詞〉』『アジア遊学』255号、2021年

関連文献Ⅲ 展覧会図録

『近代歴史画の父 小堀鞆音』栃木県立美術館、1982年
『今村紫紅・速水御舟・松岡映丘・鍋木清方……日本画の前衛たち』東京都美術館、1986年
『特別展「石井林響をめぐる画家たち」』千葉県立美術館、1990年
『開館20周年記念特別展 房総の美術—昨日から明日へ—』千葉県立美術館、1994年
『特別展 版画にみる関東大震災—「大正震災木版画集 全三十六景」』小田原城天守閣、1997年
『開館10周年 日本画の巨匠 安田 鞆彦—歴史画の魅力—展』平塚市美術館、2002年
『特別展「版画にみる東京の風景—関東大震災から戦前まで—」』大田区郷土博物館、2002年
『房総ゆかりの画家 石井林響展 後援団体「総風会」を中心に』城西国際大学水田美術館、2006年
『明治神宮外苑創建80年記念特別展 小堀鞆音と近代日本画の系譜—勤皇画家と「歴史画」の継承者たち—』明治神宮、2006年
『没後30年 安田鞆彦展』茨城県立近代美術館、2009年
『安田鞆彦展—歴史画誕生の軌跡』川崎市市民ミュージアム、2010年
『小堀鞆音没後80年展』佐野市郷土博物館・佐野市立吉澤記念美術館、2011年
『安田鞆彦展』東京国立近代美術館、2016年
『生誕135年 石井林響』千葉市美術館、2018年
『聖徳記念絵画館壁画』明治神宮外苑 聖徳記念絵画館、2019年
『明治神宮のご宝物 Cherished Treasures at Meiji Jingu』明治神宮ミュージアム、2019年
『伊豆市所蔵近代日本画展 修善寺物語 大観と鞆彦、紫紅たち』岡山県立美術館、2022年

作品・資料目録

| 作家名 | 作品・資料名 | 制作年 | 素材技法 | 作品・資料サイズ(cm) | 所蔵 |
|------------------|---------------------------|--|--------------------------------|-----------------------------------|----------------------|
| 1 磯田長秋 | 八幡太郎義家 | 制作年不詳 | 絹本着色 | 114.0×42.0 | 個人蔵 |
| 2 磯田鳳章(長秋) | 静御前 | 制作年不詳 | 絹本着色 | 120.0×42.0 | 個人蔵 |
| 3 磯田鳳章(長秋) | 写画(雪舟之図) | 1896(明治29)年11月下旬 | 紙本墨画淡彩 | 110.0×54.7 | 個人蔵 |
| 4 小堀鞆音 | 獅子図 | 制作年不詳 | 紙本墨画 | 123.6×30.3 | 個人蔵 |
| 5 小堀鞆音 | 端午太刀 | 制作年不詳 | 紙本着色 | 123.8×29.3 | 個人蔵 |
| 6 磯田長秋 | 兜 | 制作年不詳 | 紙本着色 | 124.5×30.5 | 個人蔵 |
| 7 磯田長秋 | 凱旋 | 制作年不詳 | 紙本着色 | 38.4×50.6 | 船橋市西図書館 |
| 8 磯田長秋 | 《(元寇)》下図 | 制作年不詳 | 墨・鉛筆・朱／紙 | 169.0×168.0 | 個人蔵 |
| 9 磯田長秋・安田鞆彦・古賀玄洲 | 茄子合作 | 制作年不詳 | 紙本墨画 | 127.0×29.0 | 個人蔵 |
| 10 安田鞆彦 | 鐘撞図 | 制作年不詳 | 紙本墨画 | 130.5×27.5 | 個人蔵 |
| 11 安田鞆彦 | 金魚 | 制作年不詳 | 紙本着色 | 133.8×22.4 | 個人蔵 |
| 12 安田鞆彦 | 一杯、復一杯 | 制作年不詳 | 墨／紙 | 129.5×30.3 | 個人蔵 |
| 13 | 磯田長秋宛て安田鞆彦書簡 | 1944(昭和19)年1月27日(消印) | 便箋:墨／紙 封筒:墨／紙 《虎の図》:絹本墨画 | 25.3×17.7 21.2×8.2 5.7×12.0 | 個人蔵 |
| 14 石井林響 | 晩秋の図(焚火) | 1918(大正7)～1920(大正9)年頃 | 絹本着色 | 139.8×49.6 | 船橋市(清川コレクション) |
| 15 石井林響 | 閑郷柳塘之図 | 1928(昭和3)年 | 紙本着色 | 154.0×34.6 | 船橋市(清川コレクション) |
| 16 山川永雅 | 義家 | 制作年不詳 | 絹本着色 | 139.0×42.0 | 船橋市(清川コレクション) |
| 17 山川永雅 | 宇治川先陣 | 制作年不詳 | 絹本着色 | 40.0×143.5 | 船橋市 |
| 18 川船水棹 | 雀にぞくろ | 制作年不詳 | 紙本着色 | 130.2×33.0 | 船橋市 |
| 19 磯田長秋 | 《地方官会議臨御》下図 | 1926(大正15)～1928(昭和3)年 | 鉛筆・墨／紙 | 97.3×101.8 | 船橋市 |
| 20 磯田長秋 | テッサン帳 | 1926(大正15)年 | 鉛筆・墨／紙 | 37.0×58.2(見開き) | 個人蔵 |
| 21 磯田長秋 | 京都御所 写生図 | 1926(大正15)年3月25日 | 墨／紙 | 24.7×33.0 | 個人蔵 |
| 22 | 聖徳記念絵画館記念メダル | 1926(大正15)年12月22日 | | 径7.0 | 船橋市 |
| 23 | 聖徳記念絵画館 壁画集(明治神宮奉賛会) | 1937(昭和12)年発行 | | | 船橋市 |
| 24 磯田長秋 | 《明治神宮鎮座絵巻 第一 鎮座前御料地》下図 | 1932(昭和7)～1936(昭和11)年 | 鉛筆・墨・顔彩／紙 | 43.5×56.3 | 個人蔵 |
| 25 磯田長秋 | 《明治神宮鎮座絵巻 第二十 鎮座祭の四》下図(1) | 1932(昭和7)～1936(昭和11)年 | 鉛筆・墨／紙 | 45.0×56.0 | 個人蔵 |
| 26 磯田長秋 | 《明治神宮鎮座絵巻 第二十 鎮座祭の四》下図(2) | 1932(昭和7)～1936(昭和11)年 | 鉛筆・墨・朱／紙 | 45.5×59.3 | 個人蔵 |
| 27 磯田長秋 | 《明治神宮鎮座絵巻 第二十二 鎮座祭の六》下図 | 1932(昭和7)～1936(昭和11)年 | 鉛筆・墨・顔彩／紙 | 42.4×56.0 | 個人蔵 |
| 28 磯田長秋 | 醍醐乃花見 | 1937(昭和12)年 | 絹本着色 | 132.0×36.0 | 船橋市(清川コレクション) |
| 29 磯田長秋 | 北畠親房 | 制作年不詳 | 絹本着色 | 31.3×36.2 | 個人蔵 |
| 30 磯田長秋 | (無題) | 制作年不詳 | 絹本着色 | 32.8×46.2 | 個人蔵 |
| 31 磯田長秋 | 清少納言 | 制作年不詳 | 絹本着色 | 54.2×61.5 | 個人蔵 |
| 32 磯田長秋 | 大正震災木版画集 運送馬車(京橋)原画 | 1923(大正12)～1924(大正13)年 | 絹本着色 | 59.5×45.5 | 個人蔵 |
| 33 磯田長秋 | 牧童 | 1925(大正14)年 | 絹本着色 | 35.0×41.8 | 個人蔵 |
| 34 磯田長秋 | 磯田長秋 日記(全24冊) | 大正4・5・10・13・14・15年 昭和4・5・6・7・8・9・10・11・12・14・15・16・17・18・19・20・21・22年 | | | 船橋市 |
| 35 磯田長秋 | 高砂 | 1920(大正9)年 | 絹本着色 | 145.0×50.3 | 船橋市(清川コレクション) |
| 36 磯田長秋 | 紙雛 | 制作年不詳 | 絹本着色 | 121.5×38.2 | 船橋市(清川コレクション) |
| 37 磯田長秋 | 富士図 | 制作年不詳 | 絹本着色 | 55.0×173.0 | 船橋市 |
| 38 | 昭和八年七月 磯田長秋画伯作品頒布会 | 1933(昭和8)年7月 | | 27.7×19.7 | 個人蔵 |
| 39 児玉輝彦 | 梅 | 制作年不詳 | 紙本着色(色紙) | 27.0×24.0 | 船橋市 |
| 40 児玉輝彦 | 八幡太郎義家 | 制作年不詳 | 絹本着色 | 35.0×91.6 | 船橋市 |
| 41 磯田長秋 | 静御前 | 1943(昭和18)年 | 杉戸4枚 | 176.0×91.0×3.5(1枚) | 意富比神社(船橋大神宮) |
| 42 磯田長秋 | 徳川家康 | 制作年不詳 | 紙本着色 | 127.2×30.7 | 意富比神社(船橋大神宮) |
| 43 | 磯田長秋先生 三週年記念 遺作展出品目録 | 1949(昭和24)年5月7、8日 | | 26.7×39.5 | 個人蔵 |
| 44 磯田長秋 | 日本武尊 | 制作年不詳 | 版木 | 90.2×34.7×4.2 | 意富比神社(船橋大神宮) |
| 45 | 淡水会第二回展覧会 案内状 | 1935(昭和10)年7月28日(消印) | 葉書 | 14.0×9.0 | 鎌ヶ谷市郷土資料館 |
| 46 磯田長秋 | 扇面図 | 制作年不詳 | 紙本着色 | 21.0×46.0 | 木村昌弘/Masahiro Kimura |
| 47 磯田長秋 | 親子の図 | 制作年不詳 | 紙本着色 | 14.4×20.7 | 個人蔵 |
| 48 磯田長秋 | 観音像 | 1941(昭和16)～1943(昭和18)年頃 | 絹本着色 | 9.5×7.6 | 木村昌弘/Masahiro Kimura |
| 49 | 磯田長秋 印譜 | | | 38.3×51.9 | 個人蔵 |

写真提供

明治神宮
聖徳記念絵画館

令和4年度船橋市所蔵作品展

「磯田長秋－船橋で時を描いた日本画家－」

企画・編集：益子実華(船橋市教育委員会 文化課)
執筆：益子実華、出口真結(船橋市教育委員会 文化課)
小田真裕(船橋市教育委員会 郷土資料館)

表紙デザイン：榊原愛美(船橋市教育委員会 文化課)

発行：船橋市教育委員会
〒273-8501
千葉県船橋市湊町2丁目10番25号
Tel. 047-436-2894

発行日：令和4年12月

表紙：磯田長秋《静御前》
1943(昭和18)年、意富比神社(船橋大神宮)蔵

裏表紙：磯田長秋《牧童》
1925(大正14)年、個人蔵

本図録の著作権は船橋市教育委員会に属します。したがって、この図録からの転載・複製・コピーおよびデジタル化については、その使用目的の如何を問わず無断使用を禁止します(インターネットにおけるホームページ等の使用も同様)。